

[第15回 学術集会シンポジウム]

## NICU・GCUにおける家族看護

福井トシ子

杏林大学医学部付属病院

NICU・GCUにおける家族看護は、「全体としての家族看護が焦点になる」と捉えている。この全体としての家族看護は、地域看護で経験することが多いが、NICUやGCUで行われる看護は、家族員の一人である個人を対象とするのではなく、家族をひとつの単位として考える。この家族をひとつの単位として考えるということが、NICUやGCUで行われる看護として最も重要であり、子どもの入院時から、あるいはその前から介入されなければならない。これらの視座から、NICU・GCUにおける家族看護について述べる。

### 1. NICU・GCUにおける看護の特徴と実践

低出生体重児や病児のケアの特徴は、言うまでもなく母子が離れ離れになることを余議なくされるということである。この離れ離れをいかにして少しでも短くするか、あるいは時間が短くても質の高い時間を一緒に過ごせるようにするかが、看護者に求められることであろう。このプロセスが家族看護のはじまりであると言っても過言ではない。

子どもの出生後の環境がNICUであると事前にわかっている場合は、子どもがNICUへ入室する前から母親や、父親へのケアが行われる。子どもが生まれたあとに生活する環境を知ってもらうこと、子どもが生まれたときに児の状況を予測できること、子どもの退院の見通しなど、子どもが出生する前から子どもに関心が向けられるためのケアが行われる。子どもが生まれる前からNICU内に妊婦やそのパートナーが入室してNICUの環境を見ること、感じることで、生まれた子どもの初回面会時に、①自分の子どもだけに関心を向けることができる、②描いていた子どものイメージと現実の子どもとのギャップが少ない、③現実にとるべき母親や父親としての行動を明らかにするために役立つなどの効果がある。これは子どもと親が絆を共有し、情緒的な親密さによって結びつき、家族として自覚するためのケアでもある。

子どもの治療がすすみ、在宅への移行が考えられ

る時期になると、NICUからGCUという環境へと看護の場を変える。GCUは、家族という単位をより意識した環境であり、面会時間をフリーにして子どもに会いたいときに会えることを保証している。このフリーな面会時間を、特に父親が活用している。

退院に向けた準備には、母親や父親と一昼夜をとにもする親子同室ケアがある。両親が子どもとともに、一日を送ることで、子どもの生活リズムの把握、子どもの様子を知り、退院後の生活を具体的イメージできる。できるだけ家庭での生活に近い環境をつくり、家族が関係性を紡いでいけるように支援する。治療の場から、病院と生活の場である家庭内でのギャップができる限り少なくなるように、切れ目のないケアを丁寧に行っていく。

### 2. 病院から地域での生活への移行を支える看護

医療依存度の高い子どもの退院後は、家庭内で家族がどのように対処を行っていくか、家族の不安は解決されているかなど、訪問看護によって支援を行う。地域の保健師と同行訪問し、病院から家族が生活する地域への移行をスムーズに行えるようにしていく。

そして退院後に出現が予測される、現実的で具体的な育児の不安に対処していく。この具体的な方法は、両親の同意を得たうえで、入院中の経過と退院後に必要とされるケアの内容などを、出生連絡票に記載し、この連絡票をもとに、地域の保健師は電話連絡や訪問などを行う。

退院したからと言って、すぐに病院と切り離せるものではない。少しずつ、少しずつ重心を地域に移行できるようにしていく継続ケアが必要である。退院後の家族の育児不安や、子どもの成長・発達への心配を軽減するために、「びあんず」という育児支援グループ活動の運営を行っている。このようにして家族をひとつの単位として考える家族看護の実践は、退院後にも継続される。